

## □ 統括的展望

### 寺西基之

#### 来日演奏家による盛況ぶり

2016年の音楽界は一見したところ、非常に盛況ぶりをみせた。少なくとも東京における盛況は、例年以上のものがあった。しかもその盛況は多数の大物演奏家の来日によるところが大きかったといえよう。オペラではウィーン国立歌劇場とウィーン・フォルクスオーパーというウィーンを代表する2つの団体や、マリンスキー歌劇場が来日し、いずれも充実した公演でオペラ・ファンを唸らせたが、とりわけ華やかだったのがオーケストラだった。2月にダニエル・バレンボイムとシュターツカペレ・ベルリンがこれまで来日オーケストラでは前例のないブルックナーの交響曲全曲ツィクルスを行ない、5月にはサイモン・ラトルとベルリン・フィルがベートーヴェンの交響曲全曲ツィクルスをもってくるといった、ベルリンの2つのオーケストラの積極果敢な演目が大きな話題となったし、10月にはウィーン・フィルがズービン・メータと来日、サントリーホールでのガラ・コンサートではそのウィーン・フィルをメータと小澤征爾の2人の指揮者が振り分けるという、考えられないような豪華な企画が実現した。上半期にはネヴィル・マリナーとアカデミー室内管弦楽団、ユーリ・テミルカーノフとザンクトペテルブルク・フィル、山田和樹とバーミンガム市交響楽団などが特に注目されたが、とりわけ来日オーケストラが集中したのが秋シーズン、特に11月で、ヘルベルト・ブロムシュテットとバンベルク交響楽団、内田光子とマラー・チェンバー・オーケストラ、マイケル・ティルソン・トーマスとサンフランシスコ交響楽団、クリスティアン・ティーレマンとシュターツカペレ・ドレスデン、ダニエル・ハーディングとパリ管弦楽団、マリス・ヤンソンスとバイエルン放送交響楽団、パーヴォ・ヤルヴィとドイツ・カンマーフィルなどが立て続けに来日、いずれも個性豊かなきわめてハイ・レベルの演奏を聴かせている。

ソリストも毎年音楽祭絡みで来日しているマルタ・アルゲリッチやピンカス・ズーカーマンはもちろんのこと、マウリツィオ・ポリーニ、ギドン・クレーメル、アンネ・ゾフィー・ムター、アンナ・ネトレブコなどの大物が登場してリサイタルを開き、音楽シーンを賑わせた。ムターはリサイタルのみならず、若手との室内楽アンサンブルや協奏曲も含む様々な形の演奏会シリーズをサントリーホールで開催したが、これはサントリーホール開館30周年の記念演奏会の一環としてであった。

先に触れたティーレマンとシュターツカペレ・ドレスデンもそのサントリーホール30周年記念での来日であり、これはザルツブルク・イースター音楽祭の引越公演として行なわれたものである。とりわけ豪華キャストによるワーグナー「ラインの黄金」を持ってきてホール・オペラの形で上演したのが注目されよう。このホールの空間を利用した独自の舞台演出にはやや無理があったものの、音楽的な成果は大きく、その意味では画期的な公演になった。

しかしながらこの「ラインの黄金」は、ティーレマン&シュターツカペレ・ドレスデンというビッグ・ネームやその内容の充実度にもかかわらず、客席は空席がかなりあり、券売には相当苦労したようである。同じ週のヤンソンス&バイエルン放響などは完売だったのとは対照的で、このようにビッグ・アーティストにもかかわらず明暗が極端に分かれるという現象はこれ

に限らずかなり目立った。先述のように秋に大物の来日が相次ぎ、しかもチケットがいずれも高額なこと、演奏会自体が同じ日にいくつも重なるということなども大きな要因だろう。こうしたことは今に始まったことではないが、特に2016年はそれが顕著に現われてしまった感がある。冒頭に盛況ぶりについて“一見したところ”としたのもそのため、表の盛況の裏でいろいろな歪みが出てきていることは問題である。特に外来演奏家の賑わいは東京の現象であり、地方では、かつては積極的に来日オーケストラの公演を開催していたホールなども今は財政的に難しくとても公演を買うことができないという話をよく聞かされる。スター演奏家や名門オーケストラのギャラの高騰など、背景にはいろいろな問題があり、その点を解決していかないと、結局音楽界が自分の首を絞めていくことになってしまうだろう。

#### 日本のオーケストラやオペラ団体の動向

そうした中でも、国内のオーケストラやオペラ団体、あるいはその企画に関わるホールなどは地道な活動を続けている。その活動ぶりについては別項の各論で論じられることになるだろうから詳しくは触れないが、オーケストラに関して言えば、パーヴォ・ヤルヴィとNHK交響楽団、シルヴァン・カンブルランと読売日本交響楽団、ジョナサン・ノットと東京交響楽団のように、強力なシェフの下で明確な路線を打ち出している楽団がやはり好調のようだ。これらに限らず、多くの楽団が、財政的な厳しさの中で、他のオーケストラとは異なる固有の存在感を示すべく、独自のプログラミングで勝負している。アレクサンデル・ラザレフと日本フィルによるロシア・プロ、大阪交響楽団定期での寺岡清高の“ウィーンの世紀末”シリーズなどはその端的な例だろう。逆に言えば、そうした努力をしている楽団が生き残っていくことになるのだろうが、だからといってあまりに大胆な路線に走ると一般的聴衆が離れてしまう。特に2016年度からは文化庁が助成金額の決定にあたって入場料収入を重視するようになったこともあり、その按配にどの楽団も知恵を絞っているようだ。

そうした中で、2016年にはN響が創立90周年、東響が創立70周年、日本フィルと京都市響が創立60周年、名古屋フィルが創立50周年を迎え、それぞれが記念行事を行ない、そのうち東響はノットとともにヨーロッパ演奏旅行を敢行した。また東京シティ・フィルは定期演奏会300回を常任指揮者の高関健の指揮でペルリオーズの「ファウストの劫罰」という大作で飾り、また仙台フィルも定期演奏会300回を首席指揮者パスカール・ヴェロの指揮により、やはりペルリオーズの「幻想交響曲」と「レリオ」という思い切ったプログラム（しかも舞台演出付き）を組んで、仙台のみならず東京においても記念演奏会を行なった。

オペラ団体もそれぞれに独自性を打ち出そうという工夫がみられた。東京二期会はヴィリー・デッカー演出、ヘス・ロベス・コボス指揮のワーグナー「トリスタンとイゾルデ」、カロリーネ・グルーバーの演出、シモーン・ヤング指揮のR・シュトラウス「ナクソス島のアリアドネ」といういずれもライブツィビ歌劇場との提携によるドイツ・オペラによって、また藤原歌劇団はドニゼッティ「愛の妙薬」、ベッリーニ「カプレーティ家とモンテッキ家」といったイタリアのベルカント・オペラの名作をオーソドックスな演出によって、それぞれの団体としての持ち味を生かした公演で存在感を示していた。地方の団体にも独自の果敢な試みがみられ、筆者が観たものの中では、例えば名古屋二期会のブッチェニ「蝶々夫人」は通常版でなく一部ブレス版を取り入れながら、日本的な舞台の中で合唱をコミカルに扱うことで蝶々夫人の悲劇性を際立たせるという岩田達宗の巧みな演出が生きていたし、関西歌劇団のモーツァル

ト「皇帝ティートの慈悲」は舞台を客席が囲むようなアリーナ方式を採用して、観客が歌手の歌と演技を身近に感じ、劇の中に入っていきけるような工夫がされていたのが興味深い。

オペラ団体単独の公演でなく、ホールなどの制作・主催のオペラ公演も充実したものがあつた。大阪のいずみホール、東京北区の北とびあはともにモーツァルト「ドン・ジョヴァンニ」を取り上げ、ピットのない演奏会場を巧みに生かした演出（前者は栗園淳、後者は佐藤美晴）と高レベルの演奏で観客を楽しませたし、東京文化会館は川端康成の原作をオペラ化したクリス・デフォート作曲の「眠れる美女」を俳優の長塚京三、原田美枝子、舞踏の伊藤郁女を起用して日本初演（ギイ・カシアス演出）を行なったのも注目されよう。

またいくつかのホール、あるいはそこにオペラ団体が加わっての共同制作オペラにも充実したものがみられた。びわ湖ホール、神奈川県民ホール、iichiko 総合文化センター、東京二期会などの共同制作によるワーグナー「さまよえるオランダ人」は大ベテランのミハエル・ハンペを演出に迎え、プロジェクト・マッピングを駆使した舞台を作り上げて効果的だった。またこれまで東京二期会とタッグを組んでいたびわ湖ホールは2016年度から新たに藤原歌劇団と提携し、日生劇場も加わってドニゼッティ「ドン・パスクアレ」で大きな成果を収めている。この日生劇場はこれまでの東京二期会に加え、2016年度から藤原歌劇団と手を組むことになり、ホール間とオペラ団体の連携は組み合わせが多様な広がりを見せるようになってきていることは注目される。こうしたホール間やオペラ団体の提携公演は経費を分担できるメリットがあり、文化庁の劇場・音楽堂等活性化事業の助成との関係からも、ここところ盛んになってきていたが、2016年はそれが新たな展開をみせたといえるだろう。

### メモリアル・イヤーを迎えた日本の大作曲家たち

2016年は3人の偉大な日本人作曲家にとってのアニバーサリー・イヤーであった。没後40年にあつたのが矢代秋雄で、大きな記念イベントこそなかったものの、ピアニストの堀江真理子が「矢代秋雄へのオマージュ」と題してピアノ曲と室内楽による矢代作品を特集したコンサート（東京文化会館小ホール）を開いたほか、岡田博美のリサイタルなどのいくつかの演奏会で没後40年として矢代作品が取り入れられている。

没後20年の武満徹の記念行事としては、東京オペラシティ・コンサートホールにおけるオリヴァー・ナッセン指揮東京フィルによる管弦楽作品による演奏会と、オーチャードホールにおける武満の映画音楽を特集した演奏会といった大きな催しがあり、またサントリー・サマーフェスティバルの中でも、タン・ドゥン指揮の演奏会で「Takemitsuへのオマージュ」と銘打って「ジェモー」と「ウォーター・ドリーミング」が演奏されるなど、様々な形で彼の作品が取り上げられた。

とりわけ大掛かりな記念イベントとなったのが、サントリーホールで開かれた山田和樹指揮日本フィル・東京混声合唱団・武蔵野音楽大学合唱団ほかによる「柴田南雄生誕100年・没後20年記念演奏会」である。プログラムは「ディアフォニア」「追分節考」「ゆく河の流れは絶えずして」という内容的にも重厚なものだったが、これは柴田南雄の業績を後世に伝えるべきという信念を持った山田和樹が私財を投じ、彼に賛同した有識者たちを中心に実行委員会が組織されて実現したもの。当初心配されていた集客も最終的に完売となるという、まさに山田と関係者一同の熱意と努力が実った公演で、多くの聴衆に柴田南雄の偉大さを再認識させる記念すべき演奏会となった。これが文化庁芸術祭大賞に輝いたのもっともなことである。

### 逝ける大物音楽家たち

2016年は音楽界をリードした大物音楽家が鬼籍に入った。戦後の現代音楽界をリードし、多くの問題提起を行なったピエール・ブーレーズ、近年のピリオド・アプローチの先鞭を付けて、演奏スタイルに革命をもたらしたニコラウス・アーノンクール、どちらもまさに音楽史を動かす役割を果たした大家であり、その死はひとつの時代の終わりを印象付けるものといえよう。春にアカデミー室内管弦楽団を引き連れて来日して雙鬘たる指揮ぶりを示してくれたネヴィル・マリナーも10月、92歳で現役のまま世を去った。20世紀を代表する大フルート奏者だったオーレル・ニコレも90歳で息を引き取っている。

日本の音楽界にとって大きな損失は中村絢子が逝去したことだろう。とかくそのスター的な華やかさが云々された彼女だが、戦後の日本の音楽界の発展における貢献の大きさは測り知れないものがあり、またこれからの音楽界のために若い演奏家を育てることに並々ならぬ力を注いだ教育者でもあるなど、実に懐の深い人だった。ここ何年か闘病生活を余儀なくされ、2016年春に元気な姿で活動を再開した矢先の死は惜しむに余りある。作曲家でシンセサイザー音楽のジャンルに新しい可能性を開拓した冨田勲の急逝も、まださらなる活躍が期待されていただけに残念でならない。批評界では日本の音楽ファンにきわめて大きな影響を与えた宇野功芳が帰らぬ人となった。

### その他のトピックス

明るいニュースとして、アメリカの最も権威ある音楽賞であるグラミー賞のクラシック部門「ベスト・オペラ・レコーディング賞」に、小澤征爾がサイトウ・キネン・フェスティバル松本で録音したラヴェル「子供と魔法」が輝いたことが挙げられる。長年アメリカで活動していた小澤にしては意外にもこれが初のグラミー賞受賞であるが、彼がサイトウ・キネン・フェスティバルで積み重ねてきたことが世界的に評価されたことは喜ばしい。また音楽之友社の2016年レコード・アカデミー賞でも小澤指揮の同フェスティバルのバルトーク「青ひげ公の城」が大賞に選ばれた（この賞でも小澤が大賞となったのは初である）。そのサイトウ・キネン・フェスティバル松本は現在セイジ・オザワ松本フェスティバルと改称し、2016年は小澤とファビオ・ルイーザが振り分けて開催された。小澤にはぜひ今後も引き続き活躍してほしいが、一夜のプログラムをフルには振れない最近の体調のことを考えると、今後の音楽祭のあり方をどうするかも考える時期にさしかかっている。

サントリー音楽賞をトッパンホールが受賞したことも大きなニュースだった。日本の音楽賞の中でも特に重要な賞であるサントリー音楽賞は、これまで演奏家や作曲家や音楽団体が受賞してきただけに、コンサートホールが受賞したことがおおいに話題となったのは当然だが、室内楽ホールとしての空間を生かしつつ、考え抜かれた系統的な企画で年間多くの主催公演を開催し、しかもそのほとんどが完売を続けているこのホールの運営と活動状況は日本の室内楽・歌曲ジャンルを盛り上げる大きな役割を果たしており、まさにこの賞に値する価値のあるものといつてよい。2016年5月に開催されたトッパンホール15周年室内楽フェスティバルにしても、クリスティアン・テツラフ、ラルス・フォークト、ユリアン・プレガルディエンをはじめとする名手たちを集めて、1週間にわたってロマン派を中心とした室内楽や歌曲による綿密に構成されたプログラムの演奏会を開催、まさに同ホールの面目躍如たる企画と内容であった。音楽ホールの理想のあり方をトッパンホールはひとつの範として示している。